

宿縁

十二月号

仏法は死ぬ用意でなく
どう生きるかである



今頃の時期は、新しい年のカレンダーが届くと同時に予定表への書き込みが忙しくなきます。年齢を重ねることに少しずつその書き込みが少なくなるとはいえ、世間の雑事はなかなか減りません。

室町時代の同期の名僧、一休禪師と本願寺の蓮如上人とは親交があったとも言われていますが、真偽は別として二人にまつわる往復書簡が面白く伝えられています。

一休宗純から「蓮如殿へ」
あれして これして あれしてこれして

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派 **中原寺**

TEL 0477-372102
FAX 0477-372102

あれして これして あれしてこれして
あれして これして ……
とかく人間とは忙しきものなり

蓮如から「一休宗純殿へ」

寝て 食て 寝て 食て
寝て 食て 寝て 食て
寝て 食て 寝て 食て ……

かくて人間とは死ぬるものなり

お二人の平凡な交信からは、まことに昔も今もこれからも、人間の営みのあり様をズバリ言い当てたものと教えられます。

高度に進歩していく科学技術により人の為すことは日々軽減されていながら、大切なことに遭遇することなく、空しく人生を過ごしていないか、肝心なことを先延ばし先延ばしにしているか、そのことに真向きにしてくれるのが仏法です。

本願力に遇いければ
空しく過ぐる人ぞなき
功德の宝海 満ち満ちて
煩惱の濁水 へだてなし

(親鸞聖人)

私の生きている姿は、私には見えません。仏は私のあり様を見抜き、そこに願いをかけ、絶えず目を覚ましてくれとはたらきづめの世界を「阿弥陀如来の本願力」といいます。赤子を憶う母の姿にたとえられます。

「遇う」という字の意味は、思いがけずめぐり遇う、期せずして遇うということ、私側からの発見です。発見とはすでに来ていた世界に気付くということ、私の勝手な思い(私のモノサシ)が破られて、すでに来ていた真理の世界に驚き入るということ、驚きは同時に感動であり、同時に新たな歩みの始まりです。

それは高見の世界に逃げ込むのではなく、惑いの世界に在って仏の世界(本願力)に吸引され、仏のモノサシが私の軸と変わる人生道への新たな転換の歩みです。

仏法を聞くのは死ぬためだと思っていたら大間違いで、仏法を聞くのは永遠のいのちを生きるためです。

私たちは自分のモノサシ(世間心)を確かなものにしようと頑張ることが自分に果たされた人生だと思つています。少しでも人より偉くなること、少しでも人より多く持つこと、負けるより勝つこと、それこそが意味ある人生と勘違いして、明日こそは明日こそはと夢を追い続けています。そして行き着くところ、こんな筈ではなかった、或いは自分なりに頑張ったのだからという自己への慰みで終わるのではないのでしょうか。

このことの空しさに目覚めさせられるのが仏法の出遇いです。そしてその「出遇い」の原型が『仏説無量寿経』にあります。

地上においてさとりを開かれた釈尊がこの世に生まれ出た目的は、「阿弥陀仏の本願の救いを説き、あらゆる人々が救われるため」であり、宗祖は『仏説無量寿経』を出世本懐の経であると教えてくださいました。そこを浄土真宗の常のお勤めとして大切に

にしている『正信偈』の冒頭には「法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所(ホーゾウボーサツインニージ、ザイセージーザイオーブツシヨ)」と世自在王仏と法蔵菩薩の出遇いが書かれています。『無量寿経』には、法蔵菩薩が誕生した背景が説かれ、「時に国王ましましき」と始まります。法蔵菩薩は、元国王です。国王ですから、財産も権力もある地位にあり、暮らしに困っていないのです。その国王が世自在王仏に出遇ったとあります。どのような出遇いであつたかという点、「仏の説法を聞いて深く喜び、そこでこの上ないさとりを求める心を起こし、国も王位も捨て、出家して修行者となり、法蔵と名乗った」とあります。このことは、なんでも思い通りになるのであれば、仏法は不要になるのではなにか。そんなふうには思いがちですが、実はすべて具わつても満足できないということとを、「国王」は象徴しているのです。その法蔵菩薩がすべての人々を救いたいという本願を建て、成就して南無阿弥陀仏となつたというのです。その南無阿弥陀仏と仕上がつた名は、「世間」、苦の娑婆、人間世界から離れてあるのではなく、そのど真ん中であつて、念仏の声となり、われに帰せよと獅子吠ゆる如くはたらきづめなのです。

仏教には、自分を徐々に高めて一定の境地に到達するというイメージがあります。人格向上、精神鍛錬、あるいは不安に動じない心境になると決めつけていませんか。到達ではなくスタート、始まりの仏教です。私が到達するのではなく、さとりのはたらきが私に到達して、現前の事実が目覚めた、新たな出発を開いて下さるのが浄土真宗の信心です。

【寺灯雑記】

○国府台小児童が来寺

11/15

「生活科実習 町探検」という国府台小学校児童の課外授業で、この日の午後、小学二年生の生徒が4班に分かれて当寺を訪れました。

本堂に入った児童たちは、住職さんからのお話と説明を神妙に聞き、あまり経験のない堂内の雰囲気や仏様について学びました。

町で行ってみたい所では、ほかに派出所、マルエツ、お寿司屋さんなどを訪問しようです。

○好天のもと「報恩講法要」が勤まる

11/20～21

真実のみ教えをお示しくくださった親鸞聖人に感謝し、阿弥陀さまのお救いをあらためて心に深く味わわせていただき、一年で、もつとも大切な法要「報恩講」が好天に恵まれて二日間にわたり勤められました。

第一日目は、夕方5時からの開始に先立ち、いつもは山門から本堂に続く参道に設ける和紙に描かれた竹の絵灯籠は、風が出てきたため本堂内陣に置かれましたがとても厳粛な光景が堂内に醸し出されました。

そうした中、第一部「親鸞さまと音楽の夕べ」は、沖本彩さんのバイオリン演奏そして懐かしい「唱歌や、旅行く親鸞」を唱いました。続いて勤行は「初夜礼讃」そして祖師前外陣では堂内の明かりを消した中で「御伝鈔」が拝読されました。御伝鈔とは報恩講において拝読されるもので、親鸞聖人の曾孫にあたる本願寺第三代覚如上人が、宗祖の遺徳

を讃仰するために、その生涯の行蹟を数段にまとめて記述されたものです。

第二日目は、朝六時半からの晨朝勤行に始まり、十一時から「讃仏偈」の日中法要、午後一時からは他寺の僧侶五人も出仕して「正信念仏偈」による速夜法要が賑々しく勤まりました。

このたびの二日間にわたっての布教は滋賀県からお越しいただいた報恩寺住職の鎌田宗雲師で「親鸞聖人に学ぶ」と題してお念仏の深い味わいをお聞きいただきました。

また、婦人会の大勢の皆さんによる「お齋作り」と接待、壮年会の方々のお手伝いに心から感謝いたします。(鎌田先生は大勢でお齋作りをするお寺は珍しいと話しておりました。)

【募集】

▽壮年会・婦人会合同年末懇親会

*十二月十五日(日) 夕方五時半

・場所：はな膳(本八幡地下鉄会館4F)
・参加費：7,000円(男性)
6,000円(女性)

それぞれに一年間の出来事を振り返りながら「法友」としてますます懇親を深めたいと思います。ご参加をお待ちしています。

▽千葉組仏壮の旧跡一泊参拝バス旅行

*令和二年三月五日～六日

・茨城県にあるご旧跡寺院をめぐる
「五浦観光ホテル大観荘」(泊)
・参加費：二八、〇〇〇円

男女を問わずどなたでも参加できます。

【法座・行事の案内】

○婦人会法座

*十二月七日(土) 一時

(十二月のカレンダーの言葉を学ぶ)

○門信徒役員会

*十二月七日(土) 三時半

○子育てサロン(パンダっ子)

*十二月九日(月) 十時～十四時

乳児、幼児と保護者が集う自由空間の場
お昼の食事が出ます。

○壮年会法座

*十二月十五日(日) 三時

十二月のカレンダーの言葉から「充実した人生とは？」を話し合う。

○清掃奉仕

*十二月二十一日(土) 十時から

○いのちの居場所を考える会

*十二月二十六日(木) 十時

ともに生きていく原理に向かつて、いのちの居場所を考え語り合う。

○教行信証を学ぶ

*十二月二十八日(土) 二時

毎月第四土曜日(原則二時から、親鸞聖人の著わされた「顕浄土真実教行証文類」を前住職による解説で学んでいます。今回は「行巻」の七高僧等の「行の解釈」

【元旦修正会】

◎新年一月一日(祝) 午前八時

新しき二〇二〇年(令和二年)を迎えるにあたって、阿弥陀さまのご加護のもと充実した日々を過ごすことを願ってご家族で参拝いたしましょう。

・おつとめ「正信偈」

・年頭法話 住職、前住職

・ご流盃の儀

(お雑煮の接待があります。)

○婦人会総会・新年会

*一月十一日(土) 十一時

○常例法座

*一月十九日(日) 一時

法話：村上弘樹師(開教専従員)

○教行信証を学ぶ(行巻)

*一月二十五日(土) 二時

○壮年会総会・新年会

*一月二十六日(日) 二時半

【十二月の掲示板のことば】

話す・聞く・読む・書く
一番難しいのは、聞く行為である